

## はじめに

Euro-Asia Summer School はこれまでに計 8 回開催されており、講義を通して知識を得ること、意見を共有すること、お互いの背景や理念・価値観を知ること成功している。私の学部時代の同期もサマースクールの参加者が多く、EU に特化した講義や副専攻のある大学に在籍している間に是非とも参加してみたい集中講義であったため、今回一橋大学からの参加者として講義を受けられたことを嬉しく思う。

第 9 回目も、韓国とベルギーを旅行している間、食べ物や住む場所を共有しながら、お互いに耳を傾け、EU とアジアの状況について話し合い検討し合う機会となった。中でもこの Summer School において今年度の興味深い点は、韓国開発研究院(KDI)が参加していることである。KDI の参加に伴い、アジア、ヨーロッパの学生だけでなく、アフリカや中東地域出身の学生と二週間講義を共にすることができた。

## 第 9 回目の Euro-Asia Summer School を通して得たもの・知見

ソウル大学、KDI、KU ルーベン大学における 2 週間の印象深かった点について講義の内容に触れながら振り返る。はじめに、ワークショップの時間である。アジアでの一週目に韓国開発研究院(KDI)でワークショップの時間があった。韓国開発研究院は、1997 年に設立され、2001 年以来、将来のリーダーの育成と知識の共有のためのプログラムを促進している。そこでは、韓国の経済発展の経験、グローバルな開発アジェンダ、韓国の財閥の成長と変革、行政改革とグッドガバナンスなどについて学んだ。これらの講義を受講した後、私たちは 4-5 のグループに分かれ、主に 2 つのディスカッションポイントについて検討した。韓国の講義を通してのハイライトと、EU とアジアの関係改善へ考えうる施策の二点である。

最初の質問に対する私自身の答えは、アジアにおける民主主義と人権の尊厳を促進することの重要性であった。市原麻衣子教授と Ramon Pacheco Pardo 教授の講義によると、EU、日本、韓国の間には共通の価値がある。二つ目の質問に対する私の答えは、最初の質問に関連したもので、アジアに地域人権機関がないことに問題意識を置いたものであった。ヨーロッパ、中南米、アフリカにはそれぞれ独自の地域機関があるが、アジアではそのような機関はなく、人権や平等は MDGs と SDGs の包括的なアプローチに関連している喫緊かつ重要なものである。私は、EU がアジアにおける人権のパートナーシップを確立するモデルとなりうると考えた。私たちのグループでは、仕事と生活の質に関するさまざまな価値について議論した。私たちのグループには、ヨーロッパ人学生 1 人、アフリカ人学生 1 人、アジア人学生 5 人がおり、ヨーロッパの学生は KDI での授業を受け、アジアにおいて仕事の経験と生活の質が強く結びついていることを指摘した。フィリピンのアジア人学生の一人は、アジア人の幸福感における優先順位は「公共の利益」であると述べた。一生懸命働きより高い職位を得ることは、人生における地位と質そのものだと彼は指摘した。

クラスでの議論の時間では、活発な議論が展開された。質問 1 においては、経済発展のための優れたリーダーを育てることの重要性が指摘されたグループもあった。これを達成するためには、教育とグローバルな結束と責任の強調性が説かれた。そして、多くのヨーロッパの学生は、私たちが議論したように、韓国の財閥と民間企業における改革、韓国の開発経験を指摘した。経済成長と効果的な政府介入、強い経済的リーダーシップを持つ中央政府、経済発展という経済問題に関する意見もあった。共通の考えとしては、EU とアジアにおける難民問題の深い理解、他の国との比較、お互いから学ぶ可能性、MDGs / SDG と優先事項との兼ね合いである。質問 2 においては、私たちのグループは、EU とアジアが共通の利益と共通の問題を持っているという答えに達した。高齢化社会、電子政府(e-government)、公共改革を含む共通の課題である。そのため、私たちは対話の機会を増やすことができる。それは、FTA 改革、SDG やグローバルな危機/地域問題(統合や移住など)などのグローバルな問題の領域を意味する。21 世紀のスキルを高める教育の重要性を再確認した。クラスでは、以下のような意見が展開された。一つは、科学技術、社会福祉、電子政府などの EU とアジアの間の知識共有である。次の意見は農業パートナーシップで、ODA パートナーと知識の共有、政府関係者間の交換プログラム、EU とアジアのバランスが挙げられた。第 3 に、地球規模の気候変動、貿易、安全保障などの地球規模の課題における研究協力であった。また、EU の制度改革が韓国の経験とドイツの統一経験に基づいた他のグループのアイデアを聞いて興味深いものだった。KDI の講義を通して、韓国の経済状況についてより知るようになり、多くの視座を得ることができた。

ワークショップの時間を通じたクラスの共通の考えは、対話、ガバナンス、EU モデルに基づくアジア連合、難民問題に関するより多くの協力関係の改善である。これを受けて私たちグループは、アジア諸国は、外交政策の問題に対する EU の交渉戦略を学び、再生可能エネルギー技術へのアクセスを確保し、個人の自由と民主主義を改善する方法を学ぶことができるのではないかと考えるに達した。ヨーロッパ諸国は、公共政策策定のための輸送などの効率的な社会インフラストラクチャー戦略を学び、アジアとヨーロッパ間においては、教育システムを構築し、学生や研究者の草の根の交流プログラムを提供すべきである。

興味深かった講義の 1 つは、「FTA が EU とアジアのビジネス関係に及ぼす影響 - ユーロッパの視点」であった。印象的であったのは、教授の「現在の世界は、グローバリゼーションまたは反グローバリゼーションのどちらに向かっているのか?」という質問である。学生の半分はグローバル化しており、半分は反グローバリゼーションに向かっていると感じていた。単に貿易輸出入の面では、現在の世界は脱グローバリゼーションに直面していると言うことができる。二週間を通して、多くの講師が Brexit や移民・難民の危機のために、脱グローバル化の脅威を指摘した。他には、「EU から連想する 3 つの言葉をあげてください」というアイスブレイキングから入った講義もあった。参加者はそれぞれに、統合、人権、FTA、単一通貨、ボーダーレス、共通のアイデンティティ、Brexit、難民危機、移民問題な

どを口にした。講師はポジティブなものネガティブなものに分け、Summer School 参加者は比較的に EU に対して楽観的かつポジティブな意見が多いことが分かった。私は参加者として、「地域統合研究の frontline にいる研究者たちは、2017 年現在が地域統合の分水嶺になりうる危機の年にある」と捉えていることをルーヴァンで体感した。

## Summer School の中で考える日韓関係

SNU と KDI での講義を通して私たち一橋生は多くの韓国人の友達ができた。渡韓は初めての私にとって韓国での日常生活は想像以上に過ごしやすいものだった。日々接する人々が国際関係を専攻する大学関係の人々であったこともあるが、彼らは私たちが知っている韓国語よりも日本語を知っており、日本の言語、文化や製品に対して好感をもって接してくれたことは大変嬉しい出来事であった。「僕は日本のドラマが大好きで日本語はドラマから覚えたよ」「kawaii は韓国でも可愛いという意味で通じるよ」「日本のこのキャラクターは今韓国で流行っているよ」そんな新しい発見の毎日だった。同時に、恥ずかしながら韓国語の勉強により関心を持つきっかけとなった。言語を知り実用できるということは、相手国への敬意を表し、ひいては自国のプレゼンスを高めるということを個人レベルで体感した。

サマースクールの後半にブリュッセルのカンファレンスに出席した。その際感じたことは、仲良くなり、お互いのことを知った過程でも自然とアジア人同士、ヨーロッパ人同士、もしくは同じ学校同士で無意識のうちに集う瞬間があるということである。何事も同質の集まりは居心地が良いが、振り返ると後半はアジア人として日本人と韓国人は同じグループとして共に行動することが多かった。この際の自然なグルーピングを思うと、一人の韓国人学生の話思い出す。彼はアジアでの地域統合をテーマに論文を書いていた。父の駐在の関係で日本にも住んでいたことのある彼は、韓国に戻った際、歴史認識や反日志向の波に苦しい思いをした。自身が日本人なのか、韓国人なのか、アイデンティティも揺らいだ際に、彼は「アジア人」というそれをカバーできるより大きなアイデンティティがもっと浸透すれば良いと考えた。ヨーロッパで当たり前のように通貨が同じであるように、パスポートを提示する必要がないように、アジアも近い将来、次の世代が当たり前のように「アジア人」という概念をアイデンティティと持ち、通貨や国境管理もそうなれば理想的だという彼の話は、とても印象的でいまでも心に残っている。もちろんアジアでの課題はヨーロッパの抱えるものとは異質のものである部分もあるが、彼のアイデンティティは間違いなくアジアにあり、それはグルーピングの際に感じたことである。私たちは、同じアジア人同士に無意識のうちに安心感を覚えている。

## ネットワーキングとしての Summer School

数々の刺激的な講義はもちろんこの集中講義の魅力であるが、加えて参加者同士のネットワーク作りも魅力の一つである。SNU でルームメートになったエチオピア出身の友達は、将来はアフリカ連合で働きたいと夢を語っていた。私も国際機関に興味があり、まだ出会って間もないのに仲良くなるきっかけとなった。また、アフリカ在住経験があったため、エチオピアの文化や風習、お洒落について聞くのはとても楽しい時間だった。加えて、私は大使館でのインターンシップ経験があるが、韓国で同室のイタリア人の友達もまた大使館での勤務経験があり、どのような経験をしたのか、これからはどんな将来を描いているのかと話を膨らませることは楽しかった。彼女は、大使館でのインターンシップを通じて国家レベルの外交官になるのではなく、地域レベルつまり EU において外交官になりたいと言っていた。(地域統合の是非はともかく) アジアにはその選択肢がない、と私が言う。「アジアでもいつかそうなる」と言われたことは今でも記憶に新しい。

私はフランスに短期留学に行った際に、エラスムスという EU 圏内の学生のネットワークに所属しながら、ショートトリップに参加したことがある。ルーヴァンでの一週間と同じように、ホステルで4、5人で同じ部屋での生活だった。その時に出会った人々の中で、今も連絡を取る友達もいるが、大多数はその場限りとなってしまった。しかし今回は、より近い経験を持った人々に出会えたこと、より同じ目標を持っている友達ができることはとても意義深く、ネットワーキングとしても魅力的な時間だった。実際に SNU の友達は1月に東京を訪れ観光をする機会もあり、私たちのネットワークは続いている。

## 総括

第9回目の Euro-Asia Summer School は KDI の参加もあり、より多彩でバックグラウンドの豊富な意見交換の場となった。地域統合をアジアで考える場合の限界や課題も見えてきたが、EU とアジアの共通する価値や問題について議論できた貴重な機会でもあった。この2週間に、参加者の価値観やアイデアを知り、将来の EU とアジアの関係のイメージについて考えるワークショップの時間を持つことができ大変有意義だった。私たちは異なる言語、宗教、政治システム、文化を持っているが、同時に私たちは同じ課題に直面しており、加えて同じ価値観を共有していることを確認することができた。市民参画、民主主義の維持における積極的な参加が重要であることを学んだ。2週間のハイライトは、ワークショップの時間から、私たちはお互いを鼓舞し、日々を通してそれぞれの価値を知っていたということにある。私は世界が脱グローバリゼーションを起こしているとは思えない。EU とアジアの関係は、グローバリゼーションにおいて新たな扉を開くと考えている。